2016年3月17日

夢の実験村

The Experimental Village: An approch To Global Problem Based on Agrarian Values

地球的課題の実験村

第65号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生　その59

なのはなユニオン
鴨桃代（かもももよ）さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

ーまちの困民むらの困民、現在どのような状況でしょう？

鴨：あまり変わっていません。農村からの労働相談は多くはなく、館山（たてやま）、鴨川（かもがわ）、銚子（ちょうし）などからの相談を団体交渉で解決しました。仕事で使う工具をローンで買わせたり、ミスの補填を労働者に強制したり、盗みの濡れ衣を着せるなど露骨な法律違反を行う会社が目立ちます。ただ農村地域は仕事が少なく、雇う側は強気で「法律を守っていたらやっていけない。」と言う経営者もいます。労働者は地元で悪い噂が流れるのがいやで会社に抗議する人は少ないのです。

ー都市部の問題はどのようなものですか？

鴨：東京周辺ではグレーゾーンの流用とか、脱法行為が多いです。有名テーマパークに労働組合が結成されました。パフォーマーとしての夢の実現のために若い人が希望を持って就職した会社でしたが、３･１１の大地震のとき、観客の避難誘導はしても、出演者への避難の指示は全くなく、寒い中何時間も待機を命じられたままでした。その対応の酷さを目の当たりにして会社への疑問が起こったと話しています。

ー都市と農村、共通の問題とは何ですか？

鴨：インターネットなどで労働者の基本的権利や労働組合が存在するなどの情報は知っていますが、会社に言うべきことを言う人は少ないのです。自分が状況を変える主体となるという自覚は形成されていません。これは日本で労働運動が広がらない背景の一つです。

ー都市と農村は人の循環でセイフティーネットの役割がありましたが、今はどうでしょう？

鴨：都市部では田舎を持たない世代が増えており、都市と農村の人の循環があるのかどうかわかりません。０８年末に取り組んだ派遣切りホットラインでは、地域や家族からも孤立した製造現場の人から相談が多数ありました。男性で２０～３０代の若者もいましたが、４０～５０代も多くいました。突然クビを切られ、職と住む場所を失いどうしていいかわからないと苛（いら）だちをぶつけても、それと闘う姿勢は削（そ）がれていました。むしろ「仕事も住むところも貯金もない自分は、家族のところに帰れない」というのです。

ー新しい職業として農業はないのでしょうか？

鴨：農業は職業としては漠然としているし、衰退していく産業というイメージが強く、朝から晩まで働き続けても生活資金を稼ぐことができるのか不安なのです。これは単に農業に就けば良いという話ではなく、農業は生活保障としての仕事になりうるのかという疑問に、農村が答えなければならないのだと思います。

ー「超高齢化社会」と言われています。どんな問題が出ているのでしょう？

鴨：６０歳以上の方からの労働相談が増えて、シニアユニオンが設立されています。同じ仕事なのに賃金は二分の一、年金だけでは生活できず生活困難に陥る、ほんとに「下流老人」が増えています。高齢化が進んでいるのに社会保障が薄く、みんな明日がわからないという事態が顕著になっていくでしょう。

ユニオンや実験村などの運動体に期待されることは、今までの「こうあるべき」にとらわれないで、自らが仕事や居場所を作り成果を分かち合うシステムを実現することではないでしょうか。人と人との協力関係を「お互いさま」と思える社会を作ることが重要だと思います。

ーありがとうございました。

年次寄合いを迎えるにあたって

実験村事務局長・佐々木希一

●あの「閣議決定」から５０年

「新東京国際空港」の建設予定地が千葉県成田市三里塚と隣の芝山町に決まったのは、１９６６年（昭和４１年）でした。今年はその決定から半世紀、ちょうど５０年を迎えます。

航空審答申が出された１９６３年、建設候補地が千葉県富里村に内定しますが、地元の反対運動が千葉県庁の知事室を占拠（６５年１１月）したことなどから政府と千葉県が改めて協議、答申から３年後の６６年に政府が示した「成田市三里塚付近」を友納千葉県知事が了承したことで、同年７月の閣議が三里塚を空港建設予定地に決定したのでした。

それから２０年におよぶ厳しく長い反対運動を経て、９１年に国が「二期工事の土地問題を解決するために･･･強制的手段を取らない」ことを確約し、同年１１月から隅谷調査団が主宰する「成田空港問題シンポジウム」が９３年５月まで１５回にわたって開かれました。シンポジウム終了に際して「土地収用採決申請の取り下げ」など３項目の所見が隅谷調査団によって示され、この所見に基づいて同年９月から国、空港公団、千葉県、反対同盟、三郡代表、地元民間代表、住民代表が円卓を囲んで対等の立場で議論する「成田空港問題円卓会議」が、翌９４年１０月まで１２回開催されたのです。

そして円卓会議の最後に示された隅谷調査団の所見には「円卓会議で提案のあった『地球的課題の実験村』の構想については、その意義を高く評価する。国は運輸省に検討委員会を設けて、すみやかに具体化のための検討を開始すること」との一項が盛り込まれ、これが今日の実験村への道を開くことになったのでした。

●空港会社による「第３滑走路」設置の提案

もちろん、円卓会議後の隅谷調査団の所見には「横風用滑走路とは別の問題」としながらも「平行滑走路の整備･･･は理解できる」との文言も盛り込まれました。その後の経緯をみれば、運輸省と空港会社はこれを盾に「平行滑走路の整備」を進め、昨年１１月には「新たな滑走路」の計画を「成田空港に関する四者協議会」に提案するに至っています。

●「実験村」の意義を改めて考える

２０年におよぶ空港建設反対運動の発端となった「閣議決定」から５０年というひとつの節目の年に、新たな空港拡張計画が「地域振興による空港と地域の共生」という大義名分の下に進行しつつあります。

それは「農業と農地を開発の犠牲に供す」という、当初の空港建設計画の誤った考え方を批判した「農的価値」や「児孫のために自由を律す」といった「実験村」構想が立脚した理念を改めて振り返り、そのために私たち実験村の村民たちに何ができるのかを考え、可能な実践を模索する契機にもなるのではないでしょうか。

２０１６年度　年次寄合い

日時　４月１７日　日曜日　１０時３０分から

会場　北総大地夕立の森（雨天：木の根ペンション）

議題　各プロジェクトの年次報告と計画

電車案内	日暮里	青砥	京成船橋	京成成田	芝山千代田	
特急　成田空港行	８：３９	８：４８	９：０５	９：４１		
				→ ９：５２	１０：０１	芝山千代田行

麦・大豆畑トラスト　金森史明

まず、１５年度の麦・大豆畑トラストの報告です。大豆は豊作でしかもこれまでより虫食いや紫斑病も少なく状態のいいものが収穫できました。麦については麦麹や種用の分くらいしか収穫できませんでした。これは収穫間際になっての倒伏により、麦が地面についてしまったところから発芽してしまったため、収穫を断念いたしました。もしまた倒伏してしまった場合は、人海戦術でいくしかありません。その際は麦刈りの呼びかけをいたしますので、ぜひご参加をよろしくお願いいたします。

１６年度では麦や大豆のほかにも何か作物を村民の皆さんと栽培できないかを検討中です。今の時点での候補は、お米、サツマイモ、里芋です。少人数で試験的に取り組んでみようと思っていますので、興味のある方は金森までご連絡ください。(yoriyosi@gmail.com)

北総大地夕立計画　平野靖識

みんなで森に入りましょう

月に一度、第３土曜（あるいは日曜）を中心に芝山町（しばやまちょう）・小寒田（こがんた）の里山「夕立の森」に入って森づくり、木こり体験をしている。目指すは空港建設や開発で失われた北総地域の森を再生して、地域の夏の風物詩であった夕立を復活させること。当面の目標は荒れた里山の再生。ネザサや篠竹で覆われていた夕立の森はすっかり掃除が終わり、いまは隣接する杉林の下草刈りをやっている。

この１年の大きな変化は、新しい村民が家族をあげて訪れて、小さな子供さんたちがブランコをしたり、木登りをしたりして、森に歓声がひびく様になったこと。車や自転車、人ごみに遠慮する町の暮らしと違い、何の制約もなく動きまわることのできる森は子供たちにとり、すてきな遊び場のようだ。

大人にとっても自分がかかわる森があることはすてきなことではないか。

下刈りが済んで明るくなった森は、地中で眠っていた木の種が芽吹き、若木に育ち、やがて成木となってあらたな樹相を形成してゆく。山仕事をしながらこの変化に付き合うと、なにがしか森の命のめぐりに関わっているという充足がある。森がくれるご褒美だ。

今年は、お隣の山の下刈りを進めます。取り壊したあずまやの再建もします。

みんなで森に入りましょう。

ネットワーク　大野和興

前年に引き続いて「国際有機農業映画祭」、「ＴＰＰ反対運動」、「アジア農民交流センター」の三つの団体・運動とつながって活動してきました。

国際有機農業映画祭では実験村からの推薦という意味を込めて、福田克彦監督作品の『草とり草紙』を２０１５年映画祭上映作品として上映しました。古い作品で、成田闘争を知らない世代が多くなっている今、どんな反響があるか楽しみでしたが、かなり好評でした。

ＴＰＰ反対運動では、実験村仲間である山形・置賜（おきたま）の百姓交流会とも一緒に活動している「ＴＰＰに反対する人々の運動」が、２０１６年１月から２月にかけて開催した国際シンポジウム「つながれアジア！　葬れＴＰＰ！国際シンポジウム」に協賛しました。国際シンポではゲストでお呼びしたニュージーランドの先住民マオリの女性歌手モアナさんが語った「私たち先住民は土地と海と水の権利回復を求めて何百年も闘っている。ＴＰＰとの闘いはその一環なのだ」という言葉が印象的でした。

２０１６年もこうした従来の活動を基軸に、国内、アジアを結ぶ活動を続けます。

香港・菜園村を訪ねて

伊藤文美（三里塚ワンパック野菜）

地球的課題の実験村の拠点である木の根ペンション。玄関から中に入ると正面に大きなたれ幕が掲げられている。「不遷不拆　石崗菜園村」。普段何気なく眺めていたのだが、まさかこのたれ幕に書かれている菜園村を訪れることになるとは思いもよらなかった。恥ずかしい話、実際訪れている時点でさえ私はまったく気づいておらず、旅の同行者の石井恒司さんが菜園村訪問中に気が付いた。

「あれ！？　もしかして、ペンションに飾ってあるたれ幕って、ここの村のことじゃない？」
私は、「え！？　そんなのあったかな？　帰国したらペンションに確かめに行こうか」

これがその写真である。なぜ、このたれ幕がペンションにあるのか、そこまでは調べられなかったが（実験村の方、知っている方いましたら、ぜひ教えて下さい）。

２０１５年９月、日本から５人で香港の菜園村を訪ねた。

香港は、東京都と同じ人口密集地。街は四方八方ビルだらけで圧倒されてしまう。４０階建て以上が当たり前だそうだ。金融と不動産が主流の香港経済は、近年、中国との融合政策が重要視され、ますます開発を進めているという。

菜園村は香港の中心部より少し離れた新界地区にある。新界＝ニューテリトリーと呼ばれているその地域は、「香港の最後の田舎です」とガイドさんが言う。そんな菜園村に高速鉄道建設の計画が突然発表されたのが２００９年。村人は何も知らされていなかったという。村人は反対し、抗議行動を行ったが、２０１１年に立ち退きとなった。

私たちはまず、「菜園村生活館」という共同農場を訪ねた。ここでは、高速鉄道反対の抗議行動で菜園村を支援したことをきっかけに、有機農業を目指し始めた若い世代が集まっている。お会いした周恩中さん・ジェニーさん夫婦は三十代で、私と同い年くらい。教師のパートをしながら、農作業をしている。

畑を案内してもらうと、なす、ショウガ、豆、カボチャ、サツマイモ、トウガラシなど多品種多品目。田んぼで米も作っている。収穫した農作物は、定期購入者に送ったり、ファーマーズ・マーケットで販売。周さんとジェニーさんは「香港の昔は５０％ほどあった自給率は、いまや２％。生活の基本である農作物が香港にはほとんどない。自分の将来を考えたとき、社会を変えるには、自分を変えないと。まずは自分で食べるものを作ってみようと思った」。

今の香港で、就職先として人気なのは、金融と不動産。この二大ビジネスが圧倒的な力を持っている。不動産会社がどんどん土地を買収し、押し迫ってくる高層ビルの群れ。香港という狭い土地面積の中で、開発に飲み込まれず、農業を続けていくことはとても大変なことだなぁとひしひしと感じてしまう状況だ。

説明を聞いている間にも若い人が何人か収穫などをしに来ていた。学生のボランティアも手伝っているそうだ。都会の人や若い人に感心を持ってもらうために、見学ツアーや映画鑑賞会のイベントを定期的に開催。１００人以上の参加があり、毎回増えてきているそうだ。「農業への関心が増えている」と手応えを感じている二人であった。

生活館からバスと徒歩で３０分ほど、移転した菜園村も訪ねた。建築中の一戸建て住宅が整然と並ぶ。その近くの仮設に暮らす年配の村の人に話を聞くことができた。聞けば、移転については政府から２つの選択肢が出されたという。

①賠償金６０万香港ドルを受け取り、引っ越しは自力でする。②政府が提供する住宅に引っ越しする。②を選べば、村の人びとはみな散り散りになり、農業も続けられるような住宅ではないと①を選んだ村人４７軒が、みんなそろって移転できる場所を探し、現在、新しい菜園村を作ろうとしている。

移転前の家の写真を大事そうに見せてくれた。立派な一軒家、果樹など草木がたくさん植わっている。移転先の住宅は、それに比べたらかなり小さいし、樹木は一本もない。賠償金だけではもちろん資金も足りず、厳しいという。それでも「家が完成したら、農地を作って、また農業をはじめたい。村の人たちと一緒に助け合って生活したい」と仮設暮らしの女性が語ってくれた。

ペンションに掲げられている「不遷不拆」の文字。「移転しない、分断しない」の意味だそうだ。結局、移転させられてしまった菜園村の人びとだが、この信念は今も変わっていないように思う。新しい世代と共に、生き残る農業・生き残る村を目指して、歩み続けていく人びとの姿が、私には印象的だった。

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

○村民費　　３０００円　　○麦大豆畑トラスト　５０００円
○通信購読のみ　　１０００円

郵便振替　００１４０－３－９２５５５地球的課題の実験村

＜問い合わせ＞
電話／ＦＡＸ：０４７６（２６）１６５４ 平野
メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp
ＵＲＬ：http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/

山あり谷ありのＴＰＰ魑魅魍魎
ち　み　もうりょう

近藤康男

前のめりは日本政府だけ、大丈夫かＴＰＰ？

昨年１０月５日の“大筋合意”を境に日本政府はググッと前のめりになり、ＴＰＰ対策の大合唱を始めた。通常国会が始まると“ウソつかない、ＴＰＰ断固反対の自民党”と共に、６月１日国会閉会までにＴＰＰ承認案と関連１１法改正案を通そうとしている。自民党では、内心ＴＰＰ反対でも声を挙げられない２２０余名の“「ＴＰＰ参加の即時撤回を求める会」改め「国益を守り抜く会」”の議員までが各選挙区で農協・農家を集めて今迄の対策に色を付けただけのＴＰＰ対策を説明し、「今でないとこんな対策費は付かない」と脅迫に余念が無い。

２月４日の合意署名の際、国内手続きの目途を明言した国は１２ヶ国中、豪州、ＮＺ，メキシコ、マレーシア、ベトナム、シンガポールと半数、しかも大半は今年後半、ベトナムにいたっては２年以内に、だ。では肝心の米国は？？

議会と業界からの突き上げが厳しく年内審議開始はかなり厳しい米国

米国議会は業界の突き上げで、ＴＰＡ法での“通商交渉での目的”を盾に反対（≒賛成）、大統領選後でなければ議会審議は始めるべきでない、（あるいは）しない、との発言が上院財政委員長ハッチ（共和）、上院院内総務マコネル（共和）、レビン（民主）など重鎮から相次いでいる。業界団体も、ＴＰＰ支持は自分たちの要求を認めさせることが前提、と明言している。大統領選候補者もほぼ同様である。

共通する要求は、生物製剤新薬の治験データ保護期間の８年を１２年に延長、実効性ある通貨操作対策、電子商取引の情報を保管するサーバーの当該相手国内設置義務禁止に金融分野も含めよ（どこでも自由な場所で管理できるよう）、自動車部品の原産地比率を厳しく、等々、最近は全米養豚生産者協会の「日本の牛・豚対策経営安定特別対策事業が、生産促進的、米国生産者の輸出機会を妨害する、ＴＰＰ違反」と息巻いて６７名の議員も公開書簡に署名している。

最大限日程を消費した場合の米国議会の審議の流れは、２月４日署名⇒１０５日（＝５月１８日）以内に国際貿易委員会による影響評価報告の議会提出、同時にＴＰＰ実施法案と大統領報告（各国ともＴＰＰ発効のための準備態勢が整う）の議会提出、⇒下院で審議開始：歳入委員会で４５日以内に採決、⇒下院本会議で１５日以内に採決、⇒上院財政委員会で１５日以内に採決、⇒上院本会議で１５日以内に採決となる。しかし５月１８日以降、年内の会期日数は下院で５４日、上院は７０日しかない。

これらの声に押され、米国政府は、相手国の国内法を米国のＴＰＰ解釈に沿って変更を求める“承認後手続き”を通して議会・業界の声を実現し、ＴＰＰ承認を求める方針を取り始めている。この圧力は日本にも向けられる。

日本の前のめりは、身動きとれない米国に代わって露払いをしているかのようだ。しかし、参院選前の争点化次第で日本もどうなるか分からない。反対運動も１月以降４月中旬までは国会内外で目白押し。次は３月３０日１４時半国会議員会館前座りこみ、⇒憲政記念館集会、⇒キャンドルデモに集まろう。

画像はインターネットのグーグルで検索したものですが、画像の著作権者は検索できませんでした。

加瀬さんのお話しを聞く集い

７０・７１年の測量阻止・代執行阻止の実力闘争で逮捕され裁判にかけられた元被告たちが２０名ばかり昨年末に集まったときに、この集いを企画しました。地球的課題の実験村の村民の平野靖識、山下茂、菅野芳秀、そして加瀬勉さん本人も元被告の一人です。今年、成田問題が５０年になるのを機会に、三里塚闘争の５０年を加瀬さんに語ってもらおうとの思いからです。参加者は元被告ほか三里塚物産や実験村から１０名。お話しをひととおり聞いたあとも、懇親会でたくさんのお話しをうかがいました。

山下茂

静かな口調、魂の叫び、加瀬勉さんの声が木の根ペンションに響く。二月十三日、加瀬さんのお話しを聞く集いを開いた。加瀬さんは、いまなお二町歩の田んぼを耕す、多古町で現役最高齢（八十二歳）の農民です。

お話は三里塚の現状から、大和国家・戦前・戦中・戦後、そして農業経営まで多岐にわたり、驚きと感激の連続でした。お話の根幹には、全て明日をみつめての検証であり、これからの生き方を突きつけられる思いでした。

加瀬さんはレジメの中で「得たる知識を己の血と肉となし、骨となして現実の闘争に力を発揮する事である」と述べている。

成田空港第３滑走路建設の動きがあります。騒音地獄区域の広がりを考えれば、反対していかなければなりません。加瀬さんのお話しを聞いて、今自分達ができるそれぞれの地平から出発していくこと、そして地に根を張ることの大切さを改めて考えさせられました。

今回、土地をいままさに取り上げられようとしている市東（しとう）さん、いまなお現闘として三里塚にいる山崎さんのお話も合わせて聞けたことが重要だったと思います。感謝します。

第３滑走路反対の声をあげていきましょう。

永田修

村民からの手紙

川浪　寿見子

７０歳を通り過ぎてもう何年か経ってしまいました。７０歳になったら、子や孫に囲まれて日向ぼっこしながら、ニコニコ顔して暮らしているんだろうな、と呑気な事を思っていました。（写真は息子、孫、私です。）

まさかポンポン痛い痛いで首相の座を放り出した安倍がクーデターを起し、日本を戦争の出来る国にしてしまうなんて、考えてもいませんでした。私は一体全体７０余年も何をして来たのだろう。

原発に反対し、９条守ろう、戦争絶対反対と思い行動し生きて来たつもりでした。しかし、何か大きな大切なことを見逃し、見過ごし、気づかずにきてしまったのだろうと焦り、不安に襲われています。

昨年の３月「村山首相談話を継承し発展させる会」で中国に行ってきました。南京大虐殺資料館は日本の過酷な加害の歴史を見せつける報道写真が展示されていました。しかも写真の全ては日本の新聞社が戦果として日本に送っていたものでした。

目を覆（おお）いたくなる蛮行三昧（ばんこうさんまい）の写真の数々、女の子から老婆まで強姦され、挙げ句殺され、その死体の山の前で勝ち誇った日本兵が立っていました。その日本兵の青年は鬼の様な形相ではありませんでした。死体の山の中からこちらを向いて目をつむっている子どもは孫と同じ年頃でした。私は立っていられなくなりました。

自衛隊の青年にこんな蛮行をさせる訳にはいきません。戦争へまっしぐらの安倍首相を一刻も早くやめさせなければと決意を新たにした訪中でした。

元中学の社会科の教師をしていた友人の「近現代史を教えないのは国家犯罪だ！」という言葉が重くのしかかってきます。

３月２６日（土）週刊金曜日の協賛で「戦争へまっしぐらの安倍首相！　もうやめろ！！」の集いを企画しています。歴史的な局面を迎えている今、参院選は２０％投票率を上げさえすればファシスト安倍を引きずり降ろすことができます。

日向ぼっこをしている場合ではなさそうです。

「村民からの手紙」　大募集です。

村民の近況、お知らせ、提案などなど、村民のみなさんからの手紙を募集中です。

現地の企画や行事になかなか参加できない村民のみなさんも、手紙でいろんなことを知らせて下さい。

【手紙の送り先】

〒286-0046　千葉県成田市飯仲２９７－４

平野 靖識

【編集後記】

今号は、年次寄合のお知らせを掲載しました。１９６６年の閣議決定で空港が三里塚に強行着陸して半世紀という節目の年の年次寄合です。できるだけたくさんの皆さんの顔がみられることを期待しています。（Ｋ．Ｓ）

■編集・発行／2016年３月１７日「地球的課題の実験村」
■購読料／年間1,000円（年３回）
■６５号編集担当／佐々木希一・平野靖識
■共同代表／柳川秀夫　千葉県山武郡芝山町香山新田２２
大野和興　埼玉県秩父市大宮５７３４－４